

生き生きと動く子どもを育てる教育課程の編成

I 研究の立場

1. テーマ設定の理由

(1) 研究のあゆみ

本校は、附属小・中学校の特殊学級を母体として昭和55年に開設された養護学校である。以来、教職員の増加、高等部の設置など教育条件の変化や子どもたちの実態の重度化、養護学校学習指導要領の改訂などの理由から、「発達に即応した教育課程の編成」というテーマを設定して、一人ひとりの能力・特性に応じた教育を目指して研究を進めてきている。

昭和55年度は、特殊学級時代の指導計画を参考にして生活単元学習をはじめ日常生活の指導、作業学習、教科別学習、特別活動など各教科・領域についての大まかな指導計画を作成した。そして、次年度からこの指導計画を基に一人ひとりの実態に応ずることができる内容に修正していくことにした。

昭和56年度と57年度は、小・中・高の3学部が同じ研究課題のもとで研究を進めた。このことは子どもたちの実態を知り、研究体制を確立することで意義があった。そこでわたしたちは当面の課題を、精神発達遅滞児教育の中核的指導形態の一つである生活単元学習に焦点を当てることにした。その際、子どもたちの実態として、表情に之しい、人の言いなりに動くなどがあげられ、もっと活発な子どもにできないかということや、この教育では「なすことによって学ぶ」と言われるように、身体を動かすことによって学ぶということなどを理由に「動きに視点を当てた生活単元学習の展開」というサブテーマを設けて指導計画の改訂を行った。「動きとは、より生き生きと活動することを目指して、生活体（人）と外界（環境）とのかかわりを向上させることである」ととらえて子どもたちが活発に動けるような内容を取り入れた指導計画を作成した。

昭和58年度と59年度は、昨年の反省や課題を踏まえ一人ひとりの能力・特性を生かして活発に動くことを願って、「生き生きと動く子どもを育てる教育課程の編成」というテーマを設定することにした。58年度は、日常生活の指導、作業学習、音楽、図画工作・美術、体育、59年度は、国語、算数・数学、養護・訓練、特別活動の改訂を行い一応完成することとしている。

以上のことをまとめるとP(6)の表1のようになる。

(2) 生き生きと動くとは

子どもたちの実態を大まかに見ると、文字が書けない、自分の意志を表現できない、友達と遊べないなど、できない場面が多く目につき、何をどのように指導すればよいかわからないことがある。しかし、活動の様子を細かに観察すると、ブランコでは一人で遊ぶ、自分の気に入ったものには手を出す。自転車や手押し車などの乗り物には喜んで乗るなど、興味・関心のあることに對しては自ら働きかけようとする姿が見られる。ここに指導の糸口や方向性を見出すことができる。

わたしたちは、子どもたちの示す興味・関心、自らしようとする事などに目を向け、それを手がかりに、内容を分類し、いくつかの活動に組織し、発達に即応した指導をしていかなければ

ならないと考える。

このような考えにたち、わたしたちは昭和55年度に作成した教育課程を基に年次計画で指導計画の充実を図ることにした。その際、教育課程全体を貫く基本的な考えを設け、その考えに立って指導計画の見直しを行うことにした。子どもの表情、行動などの実態や文献による研究を参考に、子どもたちを意欲的に活動させるためにはどのようにすればよいかということで「動き」に視点をあて研究をすすめてきた。

以下「動き」についてのとらえ方の変遷を述べる。

① 昭和56年度

ア。「動き」に視点をあてた根拠

◦実態

- ・表情に乏しい・人になされるままに動く・人や物とのかかわりが少ない
- ・指示理解が劣る等（詳細は本校研究紀要第2集参照）

◦教師や親の願い

- ・物事に触れたり、作ったり、感動したりするような多様な経験をさせたい。
- ・個と集団とのかかわりあいの中で意欲的に行動できる力を身につけさせたい。
- ・生活場面で具体的問題に直面したとき、自らの力で解決していく能力を身につけさせたい。

◦社会の要請

- ・養護学校教育の義務制、国際障害者年等を機に障害児教育のあり方への世論が高まり、一人ひとりの障害の程度に応じた指導内容・方法が要求され出した。

イ。文献からの示唆

◦フロスティック

- ・「身体は、どんな人にとっても重要な所有物であり、しかも感情や動きを最も直接的に表現できるものである。身体活動の積極的促進こそ、子どもの活動意欲を高め、望ましい人間形成を図る上で重要な役割を果たす」（「ムーブメント教育」フロスティック著）

◦ピアジェ

- ・思考の発達を感覚運動期、前操作期、具体的操作期、形式的操作期の4段階に分けている。感覚運動期や前操作期など発達が初期の段階にある程、五感や手足、からだ全体を使った活動が思考を進めやすくするとともにその発達を促す。

ウ。「動き」のとらえ方

以上のようなことから、「動き」を取り入れた学習指導をすることは、子どもたちの生き生きとした楽しい学習活動が期待でき、活動しながら生活に必要な条件を身につけることができると考えた。そこで、「動き」を心情的（内的）行動と身体的（外的）行動の両面をもつ全体的人間としての観点から、「合目的な活動のさせ方はどうあればいいか」ととらえ、生活単元学習の実践授業を通して研究を進めた。

その結果、合目的に活動させるためには、教材教具の工夫、役割分担、友達どうしの助け合い・認め合い、活動の見通しをもたせること等、いくつかの大事な要素があげられた。しかし一方においては、「合目的な活動のさせ方…」という考え方は、活動の方向が指導者の意図した方にしか向いていないのではないかという反省がなされた。

② 昭和57年度

前年度の反省をもとに、子どもが「動かされる」「活動させられる」という考えではなく、目的に向かってその子なりに「動く」「活動する」という考え方に立って「動き」を再考することになった。

子どもが、自らすすんで「動く」「活動する」場面は、その子の欲求や興味・関心のあるものが、指導者のねらいと一体化し授業の中に準備されたときに表れる。つまり、その子にとって意味ある環境が準備されたときに、自らすすんでその環境に働きかける。このようなことからわたしたちは、レヴィンの考えをもとに「動き」を「より生き生きと活動することをめざして、生活体(人)と外界(環境)とのかかわりを向上させることである」と考えなおした。

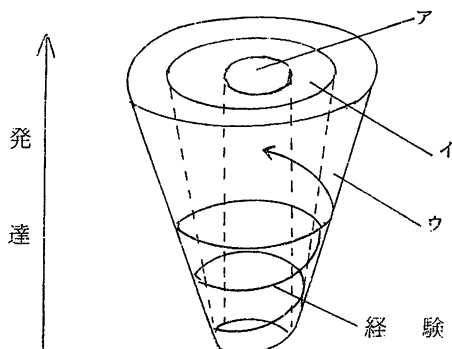
その際、「めざす子ども像」を作成し、それにせまるための実践授業を試み、指導計画を作成した(研究紀要第3集参照)

「動き」のめざす子ども像	<p>1. 動作の段階(個体)</p> <p>(外界にかかわりなく、本人の意志も薄く、他からなされるがまま、あるいは自己規制がなく、生理的欲求にまかせるままの状態)</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ ことばや動作による指示があると動く子ども。 ○ 教師や友だちの手助けで動くことのできる子ども。 ○ ごく身近なことに興味・関心のもてる子ども。 <p>2. 活動の段階(生活体)</p> <p>(一つひとつの行動の中で、本人の意志と身体活動とが一致している状態であり、次の行動への目的はなく、行動そのものに没頭している段階)</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 意志表示のできる子ども ○ 模倣のできる子ども ○ 進んで行動する子ども <p>3. 行為の段階(社会体)</p> <p>(見通しをもって行動できる段階)</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 人に指示のできる子ども ○ 判断のできる子ども ○ 目的をもって行動できる子ども ○ 創意工夫のできる子ども
--------------	--

③ 昭和58年度

本年度は、昨年度作成した「めざす子ども像」を追求すべく、「動き」を「生き生き動くこと」と置きかえ、そのとらえ方をさらに具体的に表すことにした。即ち、「生き生きと動くこと」とは、めざす子ども像のそれぞれの段階において「自分のもっている様々な能力を十分に発揮し目的に向かって精いっぱいがんばる姿」ととらえた。その際、生活体（人）と外界（環境）とのかかわりを向上させるために、即ち、子どもたちが生き生きと動くために、これまでの研究の成果やめざす子ども像などから次の3つの柱を設けることにした

- ア 基本的欲求の充足と興味・関心の拡大
- イ 人や物とのかかわりの向上
- ウ 自発性・自主性の伸長



ア……飢えや睡眠など生理的欲求や、安全、所属、愛情、自尊等の欲求を満ち満足感を味わわせることは、その活動にうちこむことができると同時に、さらに新しい高次な目標への原動力となる。つまり、個人を動かす基本的な欲求は自己自身を維持し、強化し、自立を獲得していこうとするはたらきをもつ。また、このような欲求は、将来社会生活を営んでいくときの道徳や価値の源泉となる。

興味は、個人の有する欲求と密接な関係がある。

個人の欲求にふさわしい活動に対して興味をもたれ、また興味をもたれる活動をなすことによって、それに必要な能力が発達する。学習に際して指導内容や教材教具等が子どもにとって興味をもたれたとき、学習が積極的に行われ自発的に展開する。

- イ……子どもは、自分と対する他者との間に相互に感情を芽ばえさせ意志を伝えあい受けとめあっていくなかで他者の存在や自己の存在に気づき、次第に社会的存在へと成長していく。社会的存在としての人間の行動は、次第に社会的に承認された方法で行われるようになっていく。そのためには、体をつかった様々な経験を通して物とのかかわり方を学び、事物・事象への対処の仕方を向上させていかなければならない。
- ウ……基本的欲求の充足と興味・関心の拡大、人や物とのかかわりの向上を進めていく過程で自発性・自主性の伸長が図られると考える。この自発性・自主性の要素としては、他人に促されなくても、自分から進んである行動をしようとする気持ち、自分の行動が周囲の環境に何らかの形で有効な変化をもたらすことができるという感じ、やりだしたことは最後まで自力でやりとげたい、成功するまでがんばりたいと願う気持ちなどがあげられる。このような要素を含む自発性・自主性を伸長させていくことは、子どもの現在及び将来の生活をさらによりよくしていくためにたいせつであると考えられる。

以上の考え方の基に各指導計画づくりをしていくことにした。そして、各指導計画の中で小・中・高の各学部で当面の課題としている教科・領域を取り上げてそれを各学部ごとに掘り下げて実践研究を行うことにした。これについては各学部の研究の中で述べる。

2. 研究内容

(1) 昭和58年度

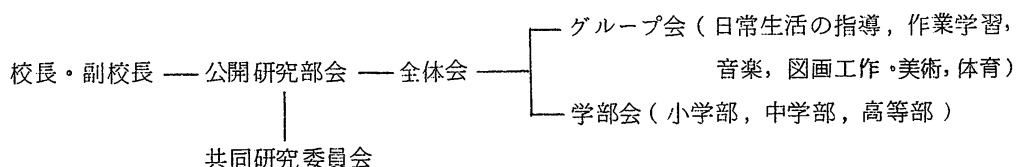
日常生活の指導，作業学習，音楽，図画工作・美術，体育

(2) 昭和59年度

国語，算数・数学，養護・訓練，特別活動

3. 研究組織及び研究の進め方

(1) 研究組織



(2) 研究の進め方

① 公開研究部

研究全般に関する企画推進に当る。

② グループ会（グループ研究）

各学部から，教科・領域等の部員が参加し，小・中・高の一貫を図りながら指導計画作成に関する研究を行う。

③ 学部会（学部研究）

学部で課題としている指導計画についての研究を2年間行う。

④ 全体会

全教官で研究に関する共通理解を図ったり，相互研修を行ったりする。

⑤ 共同研究委員会

大学の教官と公開研究部，校長，副校長，校務主任で本校の研究について協議する。

4. 研究計画（昭和58年度）

学 期	主 な 研 究 内 容
一	<ul style="list-style-type: none"> ○ 研究構想審議 ○ 学部研究分野決定 ○ 実態調査 ○ 指導計画改訂作業 <p style="text-align: right;">二学期まで続く</p>
二	<ul style="list-style-type: none"> ○ 研究授業（10月25日高等部，11月9日小学部，12月9日中学部）
三	<ul style="list-style-type: none"> ○ 学部研究のまとめ ○ 研究紀要第4集の発行

表1 本校の研究の歩み

年 度	5 5年度	5 6年度	5 7年度	5 8年度	5 9年度	60年度	
沿革の概要	<ul style="list-style-type: none"> ・附属養護学校開校 附属小・中教室を借用 	<ul style="list-style-type: none"> ・伊敷町に新校舎建設 	<ul style="list-style-type: none"> ・新校舎落成，移転 ・第1回研究公開 (58.2.18) 	<ul style="list-style-type: none"> ・第2回精神薄弱教育 全国大会会場 ・教官配置定数一応完了 	<ul style="list-style-type: none"> ・第2回研究公開 (59.6.1) 		
	小学部 3学級 中学部 3 " }	<ul style="list-style-type: none"> ・高等部1年設置 (学年進行による) 		<ul style="list-style-type: none"> ・高等部3年完結 			
研究主題	発 達 に 即 応 し た 教 育 課 程 の 編 成						
	学校テーマ	「動き」を生かした生活 単元学習の展開		「動き」に視点を当てた 生活単元学習の展開		生き生きと動く子どもを 育てる教育課程の編成	
	学部 テーマ	小	<ul style="list-style-type: none"> ・意欲を持たせるための 発達段階に応じた教材 ・教具の工夫 	<ul style="list-style-type: none"> ・子どもがより生き生きと した活動ができる環境 づくり 	<ul style="list-style-type: none"> ・生き生きと動く子どもを 育てる日常生活の指導 — 感覚運動に 視点をあてて — 	日常生活の指導	第三回 研究公開
		中	<ul style="list-style-type: none"> ・生徒同士の人間的かか わり合いを深める指導 の在り方 	<ul style="list-style-type: none"> ・意欲的に学習させる条 件づくりと場の構成 	<ul style="list-style-type: none"> ・生き生きと動く子ども を育てる体育指導 — 生徒がある運動を さぐる — 	体 育	
高		<ul style="list-style-type: none"> ・自ら判断し，行動する 生徒の育成 	<ul style="list-style-type: none"> ・見通しをもち，進んで 活動する生徒の育成 	<ul style="list-style-type: none"> ・一人ひとりの意欲を高 める作業学習の計画と 実践 	作 業 学 習		
研究 内容 と グルー プ編成	<ul style="list-style-type: none"> ○小・中・高の指導計画 作成 特殊学級時代の改 訂 高等部設置に必要な 計画作成 ・教育課程編成の立場 ・各学部の指導計画題 材一覧 	<ul style="list-style-type: none"> ○指導計画の改訂 ・新学習指導要領の分 析 ○生活単元学習の計 画と実践 		<ul style="list-style-type: none"> ○各学部一貫した指導計 画の作成(グループ研 究) ・日常生活の指導 ・作業学習 ・音楽 ・図画工作(美術) ・体育(保体) 	<ul style="list-style-type: none"> ・国 語 ・算 数(数学) ・養 護・訓 練 ・特 別 活 動 		
研 究 紀 要	研究紀要第一集	研究紀要第二集	研究紀要第三集	研究紀要第四集 (学部研究編)	研究紀要第五集 指導計画編		